

第1章

第2回 「像」と「思考」

著者:たけうち うみ

1.1 範囲

『論理哲学論考』範囲:2.1-2.225 および 3-3.05

1.2 前回までの課題

前回までの課題を確認する。解決への糸口となりそうな点（思いつき）については矢印の後に補足している。

1.2.1 序

1. おそらく本書は、ここに表されている思想……をすでに自ら考えたことのある人だけに理解されるだろう (p.9)
「すべての導出はア・プリオリに成立している」(5.133,p.79) のだから、本書の内容も先験的に、つまり読む人によらず理解されうるべきである。それなのになぜウィトゲンシュタインは大多数の人に理解されることをあきらめているのか？ →1.「成立している」ことは「示される」ことであって、「語られる」ことではないから ([4,p.73]「示されるものと語られるもの」参照)。
- 2.『論考』の宛名先は、基本的にウィトゲンシュタインの周辺（ラッセル、フレーゲら）のごく小さな哲学、論理学のサークルであるから。リテラシーのない相手に読まれることをそもそも意図していない、あるいはそれほど重視していない。

1.2.2 本文

1. 2.011 — 事態の構成要素になりうることは、ものにとって本質的である。
「本質的」とは？ 本質的という言葉は経験に依存している気がする。「ア・プリオ

り」でないのでは？ →1. とりあえず原文を見てみよう：

Es ist dem Ding wesentlich, ...

es が コンマ以後の内容を指す仮主語で it のようなもの、dem Ding は定冠詞付きの与格*1で「もの der Ding にとって」の意、wesentlich が「本質的な；基本的な；重要な」を表す形容詞。ようするに essential である（[6] の両英訳はそう訳しているし、手持ちの辞書でも英訳に掲げられている）。言い換えればものであるための必要条件が「事態の構成要素になりうること」であると考えてよいだろう。これならば経験に依存しているというより、単なる主張・言明である。

2. 2.012 — 論理においては何かひとつ偶然ではない……

「偶然」などの用語が確率論を思わせる。彼の確率論観とは？ →1. のちの本文に確率論が出てくる。「測度」なんかの用語も出てくるがいまの意味ほど厳密ではない。

Wikipedia「アンドレイ・コルモゴロフ」より引用：

彼以前の確率論はラプラスによる「確率の解析的理論」に基づく古典的確率論が中心であったが、彼が「測度論に基づく確率論」「確率論の基礎概念（1933年）」で公理主義的確率論を立脚させ、現代確率論の始まりとなった。

いっぽうで『論考』の完成は1918年、「コルモゴロフはギムナジウムを1920年に卒業した」とあるとおり、まだコルモゴロフは学生である。

3. 2.0123 — 私が対象を捉えるとき、私はまたそれが事態のうちに現れる全可能性をも捉える

ここの「捉える」とは？可能性にすぎない、起こらないかもしれない「事態」に現れる対象について、目で見ることや耳で聴くことといった感覚器官に依存した「捉える」という動詞が結びついて良いのか？ →1. 原文を引用しよう：

Wenn ich den Gegenstand kenne, so kenne ich auch sämtliche Möglichkeiten seines Vorkommens in Sachverhalten.

副文、主文（英語で言う従属節と主節）共に「ich が kennen する」という骨格である。動詞 kennen は [2] では「よく知る」と訳される。関連語として wissen があるが、使い分けについて手持ちの辞書（アクセス独和辞典 第3版）を引用すると：

kennen は具体的なかわり合いを通して体験的に知っていることを表す（例文略）

それに対し、wissen は見聞などを通して知識として知っていることを表すとある。似たようなことは [3,p.54] のあたりにも書いてある。[3] と前回の読書会を踏まえた私の理解を述べる。「分析の結果として要請」された「諸対象の結合」である「事態」について、結合の仕方（2.032 によれば結合の仕方＝「構造」）のとりうる可能性（2.033 によれば構造の可能性＝「形式」*2、つまり対象 A と対象 B は結びつくけれど A と C は結びつかない、といったこと）を（いろいろ対象 A,B,C...

*1 ロシア語と同じ。伝統的なドイツ語教育では3格と言う。

*2 「内的性質」のことでもある

を当てはめて試してみても体験して知ることを条件^{*3}として、『対象』を体験して知った」と言えるのである。言い換えれば、対象が現れる事態の形式を **kennen** することで、またすることによってのみ、その事態に現れる対象を **kennen** できる、ということである。この「形式」「事態」「対象」にまつわる議論は、「像」についてもパラレルに議論できる。だからこの議論は今回の範囲を見ていく際にも参照することとなろう。

4. 2.0131 — 空間的对象は無限の空間のうちにあらねばならない。(空間点は対照を項とする座^{*4}である。) ……

「空間 Raum」とは何か？数学的な「空間」つまり「集合に何らかの構造を入れたもの」であって、対象 Gegenstand を要素とするものなのか？それともわれわれの住む三次元（あるいは四次元？十次元？）の物質的な「空間」のことなのか？「無限」は明晰な対象なのか？「無限の」は要素が無限個の空間なのか、それとも空間が無限にあるのか？→1.

6.031 — 集合論は数学ではまったくよけいである。[1]

クラスの理論は、数学ではまったく余計である。[2]

Die Theorie der Klassen ist in der Mathematik ganz überflüssig.

以上、6.031 にウィトゲンシュタインの「集合論」観は言い切られている。ただここでわれわれの習う数学における「集合論」全体を否定されていると考えるのは語弊がありそうで、[2] では「クラスの理論」と慎重に訳されているとおり、実際には「無限集合を対象とみなす」「カントールのような実在論的態度^{*5}を認めない」[3,p.172] という意味であろう。

2. 上で述べたとおり、ウィトゲンシュタインは基本的には集合論をあまり用いない（もちろん、積極的に否定しているのは「クラスの理論」であっていわゆる集合の考え方ではないが）。そして集合については Klass なる語を使っているのだから、空間は物質的な空間とみなして良いだろう。2.0251「空間、時間、そして色（なんらかのいろをもつということ）は対象の形式である」とあるとおり、時間や色と同列に考えられる「形式」である。1.2.3. の **kennen** の議論を思い出せば、「対象 A という項に対して空間のうちの『空間点』を座として与えられるかどうか **kennen** することは、対象 A を **kennen** する必要条件である」といえよう。そうするとここでいう「無限」とは、単純に物質的な空間が無限に広がっているというイメージでいいのではないか（もちろん宇宙のサイズは有限であるとかそういう議論はできてしまうのだが……ウィトゲンシュタインの時代の宇宙観はもしかしたら違ったのかもしれない）。

^{*3} wenn は英語の when と似ており「とき」と訳されるが、基本的に「条件」を表す接続詞である。[6] では2つの英訳ともに if と訳される。思い切って「必要十分条件」と解してしまおう。

^{*4} 前回の読書会資料、または訳注参照。いちおう再度書いておくと、変数にあたるモノが「座」であり代入される数にあたるモノが「項」である。数ではないのでこのような語を使う。

^{*5} 集合の集合、そのまた集合、「以下同様」という無限の手順を許す態度

3. ただし、空間 Raum は「物質的な空間」とは別の用い方もされる。2.013「いかなるものも、いわば可能な事態の空間のうちにある」というのは、「可能な事態」を「擬・(物質的な)空間化」した言い方であろう。また重要な概念である「論理空間 logische Raum」も空間 Raum の語を含む。[1]の訳注(5)のとおり、「可能性の総体」を「空間」と呼ぶと捉えてもかまわないのであろう。上の議論を敷衍すると、「対象 A という項に対して Raum のうちのある(可能な)要素を座として与えられるかどうか」が「事態の構造の可能性」「事態の形式」であるというような Raum が、より一般的な空間と言われているものであろう(これを書いているいま少し眠いのでこの厳密な対応は考えられていない。こんがらがっている気がする)。

1.2.3 全体

1. ウィトゲンシュタインの文体が気になる。長い文も短文もある → 1. 原文を読んでみよう。
2. ウィトゲンシュタインの文体は F・ラムゼイによって「連続的な散文を書かずに、叙述に登場する諸命題の重要性を強調するため、番号を付した短い命題を書きます……」[4,p.12]と評されている。いま[4]を引用したが、この「[第1部]ウィトゲンシュタインのテキストの特徴と読み方」には彼のテキスト構造を「ゲノム的不連続構造」として表してある。これを参照されたい。
2. 述語論理について → 1. ウィトゲンシュタインはフレーゲの述語論理、その記法である記号論理学の成果を多く受け継ぎながらも、完全に受け入れていたわけではないようだ。それについては後の部分を読むことで明らかになるだろう。
2. しかし、この記号論理学の記法は「論理形式」を理解する上で不可欠とも思われる。[3]ではあくまでウィトゲンシュタインは日常言語が十分論理を記述しうることを言っているが、いっぽうで「言語の諸機能の内、とくに像としての使用に焦点を当てる」[3,p.61]と言っている。言語の像としての使用、つまり 2.182「すべての像は論理像でもある」というように、論理形式を可能性として持つところの像としての使用に焦点を当てる限り、記号論理学の記法は常に適用できて便利であるからである。

1.3 本文

1.3.1 2.1-2.225 「像」

「像」の導入とその立ち位置

「像」という概念は単に導入されただけでなく、「(「論理」をもつところの)人間であるわれわれは一般に像を作るものである」というのが 2.1 以下の主張である。像とは、言ってしまうえば言語の一般化である。像は、2.11「模型」とか、2.131「対象の代わり」とし

て、2.11「諸事態の成立・不成立を表す」。成立・不成立を表せるから、成立する事態の集積である2.1「事実の像」も「作る」ことができる。像の要素とものとの対応について、これらを座とする関係が2.1514「写像」関係である。対応付けるという点において、われわれの数学における「写像」概念^{*6}に近い。2.151は、「像の関係はものの関係の表現である」という意味で、写像関係であることの言い換えである。

少し注意しておくとして2.141「像はひとつの事実である。」について、あっさりと述べられているが、一言加えて「像はそれ自体ひとつの事実である。」と強調する意図も読み取れよう。[3,p.41-]「2-4 言語がなければ可能性はひらけない」では、像は世界の「箱庭」と呼ばれている。その例として、像を持ってくるということは「音声」、「文字」、「インクの染み」、あるいは「紙切れ」という世界の具体的な事実として実在する現象や物体（モノゴト）を持ってくるということに対応している。音声の順番、インクの染みの並び方、紙切れの置かれ方と言った具体的なモノゴトの「形式」（そのうちにはインクの染みの色のような「色形式」もある）が、「対象」の「形式」を代理して「写像形式」と呼ばれているのだ。「成立していない事態というのは、現実の代理物によって像として表現される以外、生存場所をもちえないのである。」[3,p.44] 言い換えると、事実から作った像は常に事実である。それゆえに対象に還元することができ、その対象をまた「形式にそって」組み合わせることで事実を作ることができる。しかし形式に沿ったとはいえ、一度分解した像の要素（それ自体は対象でもある）から改めて作った像（これはあくまで事実である）について、そのいわば「逆写像」としてつくられる「事実」のようなモノは、（ナンセンスではないが）真とも限らない可能性でしかない。この「事実」のようなモノはしかし、像と形式を共有しているから、事実にはなりうる＝事態ではある。かくして成立していない事態が像の要素の「形式にそった」組み合わせ（の記号列）の逆写像として得られる。また成立していない事態とはこのようにしてしか表現されない。

さて、このようにして像を見てくると、この像についても「事実」であるから、「構造」「形式」などを定義していままで「事態」同様に扱うことができる。そして2.16「事実は、像であるためには、写像されるものと何かを共有せねばならない」というのは、像の言い換えである。何か像の写像する事態と「形式」を共有するということである。この像の定義から、2.182「すべての像は論理像でもある」＝「すべての像の写像形式は論理形式でもある」が導かれる。この論理形式に沿って描写された（描写するだけなら、2.22「描写内容の真偽とは独立に、その写像形式によって」行える。描写されたものを「意味」と呼ぶ。）ある状況（それは「成立・不成立」を描きつつ「真偽」がまだ決まっていない。2.225「ア・プリオリに真である像は存在しない」のである）が2.222「真」であるか、あるいは「現実との一致」をみているかを知るには、現実と比較する他ない。つまり2.223「像の真偽を知るためには、われわれは像を現実と比較しなければならない」のである。

ここで強調するのは、2.21「像は現実と一致するかしないかである。すなわち、正しい

^{*6} 現代数学における写像の定義は、「もとの集合 A の元 a からある対応 Γ によって定められる集合 B の部分集合 $\Gamma(a)$ について、その部分集合 $\Gamma(a)$ の元がただ1つであるような対応 Γ を写像という」であった。

か誤りかであり、真か偽かである」ということである。像においては「真か偽か」定まらないということはある、つまり数学で言うところの「命題」であるということで、その上で像の真偽はア・プリオリには決まらないということを言っている。さて、「形式」という語の理解はこの辺りの理解に非常に重要であるので、再度 1.2.2.3.kennen の議論を確認しておこう。

1.3.2 3-3.05 「像」と「思考」

3 — 事実の論理像が思考である。

これから、3.001 「「ある事態が思考可能である」とは、われわれがその事態の像を作りうるということにほかならない」の意味を考えよう。「事実の論理像」を 1.12 に従って言い換えれば、「何が成立しているのか/何が成立していないのか」=「事態の成立・非成立」の論理像のことである。だから、「事態が思考可能である」とは、「事態が成立しているかしていないか」ということの論理像を与えうる」と言い換えられる。このとき、2.182 「すべての像は論理像でもある」ことからその事態の像はどうぞん作ることができる。

3.02 「思考は、思考される状況が可能であることを含んでいる。思考しうることはまた可能なことでもある」。この命題を見るに、思考は「事態の論理像」と捉えても良さそうである。

さて、この 3-3.05 という部分はけっこう重要で、論理の本質を直接的に示している部分であるとも言われる ([4,p.36] の A~D 分類参照)。「非論理的なものなど、考えることはできない」という言葉に集約される部分である。論理的でないとは、論理形式に従わないということである。論理形式に従わないような「事態」に対して、像の描写との一致・不一致を確かめることはできない。このとき像は 2.21 「真か偽かである」ことはできない(ナンセンスであるとか、数学的な「命題」ではない、と表現できよう)。だから、そのような像を作ることはできないのである。ここから、論理と像、とくに言語の限界の一致が示される。これは「序」の「したがって限界は言語においてのみ引かれうる」のひとつの有力な説明である。

1.4 問題

1. 3 から 3.001 を導く際、「事態が成立しているかしていないか」ということの論理像を与えうる」という換言を行なった。しかし、「事態の成立、不成立の可能性までを確定させた上で論理像を与えうる」、つまり「真偽の確定した論理像を作りうる」というのは、「われわれがその事態の像を作りうる」を導くには過剰な条件である。というのは、事態の像を作るだけならばその真偽は確定させなくてもよいからである。ここの説明をうまくできないだろうか。
2. 上とほぼ同じだが、3.02 から得られる「思考」の換言「事態の論理像」ではなくてなぜ 3 「事実の」論理像なのか？さらにいえば 2.1 も「事実の像」となっている。

ここも「事態」でも良さそうな気もするが、なぜ？

3. 3.05 「ア・プリオリに正しい思考」とは何か。

1.5 問題に対する考察

1. 1. ひとつには、わたしの行なった換言が間違っているという可能性はある。「事実」の解釈、「現実」との違いなどが引っかかる。
2. また、真偽の確定しないもの、つまり「ナンセンス」なものも事態であると解釈することもできる。こう解釈しても他の部分でほとんど矛盾は生じない。
2. 1. 「事実」についてもういちどいろいろな記述を拾ってみよう。[2,xvi] では「事態が現実にならなっていること」という。あるいは 2.0121 「あらゆる可能性は論理においては事実となる」など。
2. あるいはまた、3.031 「「非論理的」な世界について、……われわれには語りえない」ということは、逆に言えば論理的な世界については、たとえ「偽」であっても語りうるということである。これはまた 2.0121 「あらゆる可能性は論理においては事実となる」の言い換えである。このような「論理」においては「事実となりうるもの」を、2.1 や 3 では「事実」と言ってしまうのではないか。
3. 論考の思考の流れはあくまで「事実」から「事態」に解体して分析していくものであるということを念頭に置けば分かりやすい。2 「成立していることがら、すなわち事実とは、諸事態の成立である」
3. 1. 恒真命題、「A または A でない」など

参考文献

- [1] ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』, 野矢茂樹 訳, 岩波書店, 岩波文庫, 2003 年 8 月 19 日初版
- [2] ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』, 岡沢静也 訳, 光文社, 光文社古典新訳文庫, 2014 年 1 月 20 日初版^{*7}
- [3] 野矢茂樹『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』, 筑摩書房, ちくま学芸文庫, 2006 年 4 月 10 日初版
- [4] 鬼界彰夫『ウィトゲンシュタインはこう考えた』講談社, 講談社現代新書, 2003 年 7 月 20 日初版
- [5] 永井均『ウィトゲンシュタイン入門』, 筑摩書房, ちくま新書, 2005 年 9 月 22 日初版
- [6] Ludwig Wittgenstein. *Tractatus Logico-Philosophicus* / *Logisch-philosophische Abhandlung* SIDE-BY-SIDE-BY-SIDE EDITION, VERSION 0.42(January 5, 2015), Available at: <http://people.umass.edu/klement/tlp/> ^{*8}

^{*7} 以上、文庫化している『論考』の邦訳である。これらは底本が異なっており、さらに訳出の方向性も異なっている。[1] は 1933 年改訂版（序文にあたる「バートランド・ラッセルによる解説」が付されているため、おそらく独英対訳版）が底本である。[2] のほうがよりあたらしい研究者向きの批判版を底本にし、ドイツ語の細部に忠実に（慎重に）訳しているという。

^{*8} ようするに、Web 上フリーに入手できる原著の独英英対訳版。非常にありがたい